

一般社団法人日本映像民俗学の会第 41 回二風谷大会特集テーマ アイヌと北方文化上映作品要旨

「トールミの子どもたち」 62 分 西シベリア ハンティ

撮影 1985 年 9 月・88 年 8 月 完成 1989 年 公開 1990 年 2K デジタルリマスター 2009 年

あらすじ：

西シベリアを東から西に流れる大河オビ川北岸には、永久凍土が融けてできる無数の湖沼と針葉樹林の低湿地が広がり、フィン・ウゴル系先住民族ハンティが家畜トナカイの飼育、夏の漁撈、冬の狩猟で暮らしてきた。この地域はロシア最大の石油・天然ガス産出地で、エネルギー資源が国家基盤を支えるロシアの命運を握る場ともなっている。過去にアイヌ民族もクマ送り儀礼の祭祀を行政から規制されたが、ソ連各地の先住民族も、ほぼ同じ時期と期間、公然とはクマ送りを行えなかった。ハンティの信じる最高神は雷の神、トールミ(トール)であるが、人間もクマも等しくトールミの子どもたちなのである。ハンティはクマを狩ったとき、その霊を鄭重にもてなし、自分たちハンティの創世から始まる故事来歴を様々な芸能を通じて教え込み、クマの再来を祈りつつ最高神トールミの許へ返す。この作品は、狩人が狩ったクマの毛皮を持ち帰ったところから、クマをもてなす儀礼の準備と、儀礼の進行状況と展開される芸能を、クマの霊の送り出しまで、手堅く 1 時間ほどの作品にまとめている。

制作のバックグラウンド

1960 年代、旧ソ連のエネルギー確保がアゼルバイジャンのバクー油田から、西シベリアのチュメニ油田に移り、次第にハンティの生活領域の環境を蝕んだ。低湿地の油井開発の技術インフラには重機運搬の道路整備が不可欠で、エストニアの道路建設会社がそれを担った。開発の中心都市スルグートの近郊にエストニア労働者のため大規模宿舎が整備され、交代人員のためのチャーター便が定期的に飛んでいた。道路建設会社は、環境破壊の一翼を担う存在だが、エストニアの映画人たちに無償でチャーター便の空席や宿舎を提供した。ハンティや近隣の兄弟民族マンシヤネツが、シベリア初の先住民運動に立ち上がると、エストニアの映画人たちは次々と便宜提供のもと作品制作を通じて先住民を支援した。先住民自主組織、ユグリア救済協会が運動の象徴として、クマ送り儀礼の復活を計画すると、レナルト・メリは自国の TV 局に企画を通すだけでなく、フィンランドの民放局を共同制作に引き込み、数日に及ぶ行事を完全収録するに十分な 16mm カラーフィルムを供給を、エンサイクロペディア・シネマトグラフィカ (EC) への収録を条件に西独ゲッティンゲンの科学映画研究所 (IWF) から確保した。ついに 1985 年 9 月と 1988 年 8 月に再現収録が実現した。社会情勢の激変は、メリに政治家と映像作家の立場を両立させることを許さず、EC への収録はかなわなかった。当時、EC 国際編集委員だった岡田は、1992 年 4 月にメリにインタビューする機会があり、メリも中途半端な状況を打開したいと語った。しかし、その秋の大統領指名で、命脈が尽きた。ドイツでも、かさむ統一コストに予算を削られた IWF は、EC の継続をあきらめ、次第に疲弊して 2010 年には研究所自体が閉鎖となった。エストニアのメリの後輩たちは、IWF の閉鎖を目前に、作品完成原版とクマ送り関連全フィルム素材をエストニア側に引き取った。

民族の現況：

ハンティは、ハンガリー語と類縁のフィン・ウゴル諸語を話すウラル系の民族で、ハント、ハンテと記

されることもある。ハンティは彼らの言葉で人を意味する。かつては、川の民を意味するオスチャークと呼ばれた。最も近縁の兄弟民族マンシ（かつてのヴォグル）はオビ・イルティシュ川の左岸部に暮らす。2010年のロシア国勢調査ではハンティが30,943人、マンシが12,269人となっている。ハンティは、ハンティ・マンシ自治管区ユグラに19,068人、その北に隣接するヤマロ・ネネツ自治管区に9,489人となっている。ハンティは川筋に暮らし、夏季は漁撈、冬季はリスやテンなど毛皮獣の狩猟に従事し、適地に移住する。越冬用のログハウスタイプの丸太小屋や、天幕(チュム)で暮らす。家族ごとに家畜トナカイと牧畜犬を引き連れている。移動手段には丸木舟とトナカイ橇を使うが、次第にスノーモービルの使用が増えている。地域によっては定住地に銀狐飼育集団農場が導入されたが、欧米都市型自然保護運動の独善的毛皮排撃キャンペーンで苦境にたった。ソ連時代末期以来のハンティと石油企業の攻防は現在も続いている。ハンティのクマ送りは、日本人研究者の関心を引き、星野紘は、オビ下流域の北部ハンティの研究者チモフェイ・モルダノフと『シベリア・ハンティ族の熊送りと芸能』2001年を著した。

作者について：

レナルト・メリ 映画監督・作家・政治家＝エストニア共和国第2代大統領(1992-2001)

第一次独立期のエストニア外交官の家庭に生まれ、子ども時代、両親の任地、仏・英国の学校通学で英仏両語を修めた。その後、祖国は独ソ密約によりソ連に併合、両親と共にシベリアの強制収容所で少年時代を過ごした。収容所周辺の先住民の言葉とエストニア語の共通点に気づき、これが原体験となってフィン・ウゴル諸言語が生涯の関心事となった。50年代前半、エストニアへの帰還が許され、最高学府タルトゥ大学で歴史学と言語学を専攻した。卒業後はラジオ局に勤務、フィンランド向け放送を担当する一方、旅行を重ね、紀行作家としても活躍する。ソ連がフィンランドとの関係強化に動く、ソ連全域のフィン・ウゴル民族誌の映像化をフィンランドとの合作映画として企画、合作は実現しなかったが、長編記録映画「水鳥の人々(ロシア語題名では北風の彼方)」1970年を監督する。続いて1977年、フィンランド・ハンガリーとの共同制作で、続編「天の川の風」に取組む。この作品はソ連国内上映禁止、ヘルシンキでの完成試写会へのスタッフ全員への出席禁止処分を受けたが、ニューヨーク国際映画祭で銀賞を受け、国際的に知られるようになった。ソ連の公式映画界では不遇であったが、エストニアの若い映画人に強い影響を与え、国際映像人類学委員会のソ連代表として、海外の映像人類学とソ連人類学・民族学とのつなぎ手でもあった。当初、ペレストロイカの推進役だったバルト諸国は、次第にソ連からの独立回復に向かう。メリはエストニア人民戦線の創立メンバーからエストニアソビエト共和国外相、ソ連崩壊後には、駐フィンランド大使を経て、エストニア議会から第一独立期のコンスタンチン・ペッツに続く第2代大統領に指名され、10年間、独立を回復したエストニアの国家指導者となり、映画制作の現場からは遠ざかった。それでも在任中の1997年に、「天の川の風」制作中にタイミル半島で記録し、当局の没収を逃れフィンランドに撮影素材を隠していた「シャマン」を完成させた。2006年、闘病の末、彼は世を去ったが、彼のスタッフは生前から、彼の民族誌映像全てを収めた作品集「レナルト・メリ、フィン・ウゴル語諸民族のエンサイクロペディア・シネマトグラフィカ」を企画していた。2009年、エストニア映画100周年にあたり、「エストニア映画100選」が選定され、メリの全民族誌映像6作品が全て選ばれ2Kデジタルリマスターが実現、2014年、英仏独露語にフィンランド・ハンガリア・エストニア語の7か国語対応作品集DVDが完成した。メリは語学の天才で、これら7か国語を全て自由に話した。